

# 日蓮聖人ご遺文の国語学的研究

## 春日正三

—— 消息文における代名詞 ——

(一)

平安時代の初頭には、前代盛んであった漢文学がはなばなく活躍したにもかかわらず、漢語の日本語化は日本文学の表面には、それほど表われていない。これにはいろいろな理由があるが、一つの大きな理由として、仮名文字が、万葉がなから生まれ、片カナが男子を地盤に、平がなが女子を地盤にして育ったということであろう。後者は、前者が多く漢字の補助的役割しか果さなかつたのに対し、国語表記の主流をなし、和歌や散文の発達に大いなる寄与をなしたからであり、世にいわれる国文学黄金時代を出現させるにいたつたことである。この文学の担い手である女性の感情には、漢字、漢語の与える印象が、当代の、特にあわれっぽい姿態の表現には適合しなかつたからであつたと思われる。それが、この期になると事情が一変する。すなわち、日本文学の表面に男性が押し出されるのである。殊に、世の乱れとともに人の世の無常を嘆くこの時代に、大きな役割を演じるのが僧侶である。これら新旧仏教の僧侶達は、広くこの期の文化全般に寄与するが、なかでもことば—日本語の語い—に及ぼした影響は大きかつた。説話系統の文学や、軍記物・戦

記文学に新しい語いが生まれて来る。

この時代は、漢語をそのまま使用しただけでなく、いろいろと変形し、加工して国語の中に消化摂取したのである。たとえば「尾籠」<sup>びろう</sup>「御座る」<sup>ござ</sup>の如く、固有の国語を写すのに、最初は漢字の訓をもつて当て、更にその漢字をそのまま音読し、そこで和製の漢語を作るのである。このようなことは、語い面だけでなく、今昔物語や吾妻鏡や打聞集などに示される如き特有の文体や語法となつて今日に伝えられている。

このような言語生活の変遷は、必然的要素をもつたいわば歴史の流れでもあるのだが、田舎の文化が中央文化に、武家庶民文化が貴族文化に、田舎武士の中央京都への進出と権力の増大にともなつて変遷されたものである。

「物ナムド云タル詞ツキノ頑ナル堅固の田舎人ニテ浅猿クヲカシカリケリ」「平家物語」と評された義仲のことばの中に、当時の新しい世の動きが見えるようである。

武家庶民が公卿の生活に、田舎ものが都会人に、田舎ことばが京ことばに魅力を覚え、公卿が武士庶民を東鳥と、東ことばを「えび

すことば」「舌だみたる下衆の声」とされている間は、さして大きな問題もなかったであろうが、

「総じて日蓮が弟子は京にのぼりぬれば始はわすれぬやうにて後には天魔つきて物にくるう。せう房がごとし。わ御房もそれにてなりて天のにくまれかほむる。のぼりていくばくもなきに実名をかうるでう物くるわし。定てことばつき音ねなんども京みやこなめりになりたるらん。ねずみがかわほりになりたるやうに、鳥にもあらず、ねずみにもあらず、田舎法師にもあらず京みやこ法師にもいらず、せう房がやうになりぬとをぼゆ。言をば但いなかことばにてあるべし。なかなかあしきやうにて有なり。」

#### 法門可被申様之事

となり、京都でも尊氏が征夷大將軍に任ぜられるころは、

「公家の人々いつしか言いも習はぬ坂東声をつかひ、着もなれぬ折鳥帽子に類に頭して武家の人に紛れん」「太平記、廿一」

となつて、関東の武士ことばが、京ことばに、直接・間接に影響を及ぼしてくる。

武士の抬頭、関東語の進出が、この期の中央語―京ことば―の変遷発達に重要な役割を持つて来たことは想像に難くない。

時代の進歩、それは社会の複雑化で、殊に封建的階級制度の社会においては、当然ことばによる待遇意識が生じてくる。ましては、漢字・漢語―封建的社会造りに役立つ言語―が豊富に供給されたこの期には、体言による尊卑表現も複雑さを帯びてくる。ある意味では、前期いわゆる平安期においては、奈良時代に摂取した第一次の漢字・漢語の日本語化を行なった上代語を完成させ、その中で典型的な和語の待遇表現としての敬語法を確立し発展させたわけだが、

この期においては、過渡の様相をおびながらも第二次の漢字・漢語の日本語化を行ない、未熟な和語―それはある意味では和語化であり、ある意味では漢字・漢語のままでの待遇表現を行なった―の中で、代名詞の諸相を見ながら、代名詞による待遇表現の意識はどのように働いたかについて、島田勇雄先生のいわれる「坂東法師語」という、古語を残存し易い僧侶口語の特殊性をもつ日蓮聖人ご遺文の中から探ってみたい。

#### (二)

#### 人代名詞

#### 自称

ご遺文の中で用いている自称の代名詞は、「不肖」であるが、日蓮聖人の場合は代名詞を用いないで、固有名詞の「日蓮」を使っている。これは先に引用した「法門可被申様之事」の自負であり、自覚である。この自負・自覚は、日蓮聖人の書に最もよく表われているように思う。要するに、言うこと、することすべてが絶対にまちがいのない真理であり真実であるという信念の基に、絶対者である「日蓮」と考えた結果であり、考えることが書くことそのものより優先したからにはかならない。この帰結が「日蓮」という用語の中に自称代名詞が生きている。固有名詞を代名詞として使っていることには、この期の過渡期的代名詞の変遷過程のようにも思えるが、今はこのことを述べるだけの資料を持ち合わせない。後日の機会に譲ることにする。

「不肖」には二つの意味がある。一つは、「予不肖の身たり」で、他より劣ることの意で、もう一つは、「不肖は知らず」の、自己の

謙称として用いている。

「用とぬ程ならば日蓮は流罪地罪となるべしとしりて候しかども」  
高橋入道殿御返事

「日蓮が重恩の人なれば扶たてまつらんために」

新尼御前御返事

「日蓮過去に妻る所領眷属等の故に身命を捨し所いくそばくかありけむ」  
四条金吾殿御消息

等である。

このほかに自己の謙称として用いているものに、「それがし」「余」「われ」「我等」があり「われ」は近古を通じて最も普通に用いた自称の代名詞である。「われら」も「われ」と同義となつて謙遜の心持を表した上品な言葉とされた。

「我等が慈父大覚世尊は人寿百歳の時中天竺に出現しましたし  
て」  
高橋入道殿御返事

「某一人を不思議なる者に思て余の四十九億九万四千八百二十  
七人は皆敵と成りて」  
新池殿御消息

「余此等の災天に驚きて粗内典五七外典三千等を引見<sup>み</sup>に先代に  
も希なる天変地天也」  
下山御消息

「を<sup>と</sup>せ(仰)ありけるかちわら(梶原)われとはしりていまだ  
切ずばぐ(具)してまいれとありしかば」  
南条殿御返事

「わたくし」は未だ代名詞にはなつておらず、公に対して自己一  
身に関する事を意味する名詞として用いられている。

「此法門につきし人あまた候しかどもをはやけわたくし(公私)  
の大難度重なり候しかば」  
四条金吾殿御返事

室町時代にも「自身で」の意に「私に」を用いて「私に言はれた。」「私にする」と言うようにも言っていた。しかし一方では自称の代名詞としての用例も室町時代の初期から見えている。

「抑此山には鎌倉殿の御弟判官殿の渡らせ給ひ候由承て吉野の執行こそ罷向ひ候へ、わたくしらは何の遺恨候はねば、一先づ落ちさせ給ふべく候か」  
「義経記巻五」に  
とある。

「それがし」はもと不定称であったが、これが自称に用いられたのは鎌倉時代に始まり、室町時代に入ってひろまった。室町時代に「わがみ(我身)」を女に用いた。(大文典六八丁表)とあるが、御遺文の中にも

我身こそ何様にもならめと思て云と出せしかば二十余年所をおはれ弟子等を殺され」  
弥三郎殿御返事

対称

近古に於ける対称代名詞は「なんぢ(汝)」である。

その複数形は「なんぢら」「なんぢち」である。「なんぢら」は対  
者を見下し、「なんぢち」は敬意を含んでいたようであるが、室町  
時代には、文語において敬讓の意を含むことなく用いられた。対者  
を尊敬するのに、文語やもったいぶった口語には「貴殿」「貴辺」  
「御辺」「御前」「御房」「御身」が用いられている。

「一切衆生南無妙法蓮華經と唱るより外の遊樂なきなり。經云  
衆生所遊樂云々此文あに自受法樂にあらずや、衆生のうち貴殿  
もれ給ふべきや」  
四条金吾殿御返事

「今度の大事は此天のまほりに非ずや彼天は劔形を貴辺にあたへ



てあり、「是体」は代名詞と名詞との複合語である。

「中称」には「それ」があり「夫」も見られる。

「遠称」には「あれ」「かれ」がある。

不定称には、「いづれ」「何様」がある。室町以後、「そのやう」

「このやう」「あのやう」「これやう」「それやう」「あれやう」

「これつら」「それつら」「あれつら」「これしき」「それしき」

「あれしき」「それてい」が見られたらしいが遺文には見受けら

れない。

「此は詔る言にはあらず。」

妙密上人御消息

「此を推するに妙密上人竝に女房をば。」

妙密上人御消息

「此よりうつりやすきは人の心也、善善にそめられて候。」

西山御返事

「我五百塵克劫より大地の底にかくしをきたる真の弟子あり。此

にゆづるべしとて、上行菩薩を湧出品に召し出させ給て。」

新尼御前御返事

「此も又彼にはかはるべからず。」

乙御前御消息

「これをさとするを仏というこれをまよふを凡夫と云。」

上野殿御家尼御前御返事

「天台伝教は粗釈し給へども弘、残、之ヲ、大事の秘法を此國に

富木入道殿御返事

「是にあひつれ（連）させ給ぬるは日本第一の女人也。」

四条金吾殿女房御返事

「これてい（是体）の事いでんとしてやうやく世間はをとろ（衰）

へ候なり。」

兵衛志殿御返事

「それにと（取）て日蓮は離なして日本國にたすくべき者一人もなし。」

高橋入道殿御返事

「夫より今七百年也。」

松野殿御消息

「彼を軽んじては仏を軽んずるに成るべしとて礼拝の行をば立させ給へし也。」

松野殿御返事

「我身こそ何様にもならめと思て云と出さしかば二十余年所をおはれ弟子等を殺され」

弥三郎殿御返事

「小河大海におさまらずばいづれのところにおさまるべきや。」

場所代名詞

近称に「ここ」「此」

中称に「其処」「そこ」

遠称に「あそこ」「あしこ」「かしこ」「かの処」がある。

不定称には「いづく」「いづこ」の外に「どこ」の形があらわれた。その發生の経路は、イヅコの影響によつて、ツガドとなり、次いでイが脱落したのでであると推定される。

近称に「爰」の字が用いられている。

「爰に菩提心論と云一卷の文あり菴猛菩薩の造を号す。」

星名五郎太郎殿御返事

「彼こへより此へより日女御前をかこみまほり給べきなり。」

日女御前御返事

「彼処に一間四面の堂あり。」

妙法尼御返事

「かの処はとのをか（殿岡）三倍とあそばして候上。」

四条金吾殿御返事

「ざど」佐渡の国のものこれに候がよくよく其処をしりて候が申し候は。」

#### 四条金吾殿御返事

方向代名詞

近称の「こち」

中称の「そち」

遠称の「あち」が多く用いられたが、「そち」は延慶本平家物語等には用例がない。室町時代には、「あち」を「あっち」とも言った。「ら」を添えた形も、「こちら」といふのが室町時代にあらわれている。その他に「いづち」「どち」「そなた」「そかた」「いづかた」いづれもあつたようであつたが、ご遺文には見当らない。

#### 形式名詞

形式名詞とは、その名詞のもつ観念内容、意味内容が、極めて稀薄になつて形式化している名詞を指すのであつて、常に連体修飾格をとる名詞と説明してもいいわけである。

名詞、数詞、代名詞のように単独では体言の持つ職能を果たすことができずに、連体的な修飾語とともに、体言としての職能を果たすものである。

ご遺文(消息文)の中に見受けられる形式名詞は、「段」「由」「故」「為」「等」「所」などの語が見られ「間に」「ほどに」「時に」「上に」等は、更に形式化して、他の用法がなくなつて、接続助詞的に使われるものである。いづれも院政期ごろから、次の室町期にわたつて使われるものでご遺文にも多くの用例を見ることができ。たとえば、「事」であるが、常に連体修飾語をつけて使われ、その上で、体言の用法であるところの、主格、連体修飾格、連用修

飾格等に使われている。

大師講、事今月明性房にて候が此月さしあい候へ富木殿御消息「大師講」は事の連体修飾語で、事は形式名詞となる。

師檀となる事は三世の契り種熟脱の三益別人を求んや

#### 秋元殿御返事

事は主語で「師檀となる」は修飾句で、「師檀」が名詞、「と」は格助詞である。「事」は連体格とともに主語になつたものである。さうのつばさあらば寂光の宝刹へ飛ん事須臾刹那なるべし。

#### 四条金吾殿御返事

主語は「事」で、「須臾刹那なるべし」が述語で、「寂光の宝刹へ飛ん事」が主語の修飾語となる。

法門之事先度四条三郎左衛尉殿令書持其書能能可有御覧

#### 富木殿御返事

右の「事」は目的格である。

如く此法体と云も全く余には非ずた南無妙法蓮華經の事なり。

#### 四条金吾殿御返事

右のは述格である。

一闍浮提の人人各各甲冑をきて弓杖を手ににざらん時。

#### 新尼御前御返事

諸人皆死して無間地獄に墮れごとくしげからん時。

#### 新尼御前御返事

右のは助動詞「しげからん」の「ん」について連用修飾格で、形式名詞となる。

火にたきぎ(薪)を加る時はさかん也。

#### 四条金吾殿御返事

「加はる」が動詞で、「火」が主語で、「に」が格助詞、「たぎぎ(薪)を加る」は連体格で、時は形式名詞である。

右の三例の「時」は「……………」と「という程の意味に過ぎない。諸仏諸菩薩天善神等の御力の及へせ給へざらん時。」

#### 新尼御前御返事

は、「諸仏諸菩薩諸天善神等の御力」が主格で、「及へせ給へざらん時」で、連用修飾格となり、形式名詞となる。この「時」は「……………」ならば」の意である。

此使あまりに急ぎ候ほどにとりあへぬさまにかたはしばかりを申候。

#### 星名五郎太郎殿御返事

然而、世に随て阿弥陀仏、名号を持しほかに、

#### 四条金吾殿御返事

「程」には程度を表す。「ぐらい」「ばかり」が「……………」から「……………」の意に用いられたものである。

所謂師子尊者は檀弥羅王のために頸を刎らる。

#### 四条金吾殿御返事

提婆菩薩は外道のために殺害せらる。

#### 四条金吾殿御返事

又御祈禱のために御太刀同、刀あはせてニッ送、給て候。

日蓮が重恩の人なれば扶たてまつらんとために。

#### 弥源太殿御返事

#### 新尼御前御返事

迦葉童子菩薩仏に申、仏は平等の慈悲なり一切衆生のためにいのち(命)を惜、給へし。

#### 妙一尼御前御消息

彼の雪山童子の半偈のために身をすて。

#### 妙一尼御前御消息

一切衆生のために一代聖教をとき給つ。  
女人の御ためにはいとをし(最愛)とをもし□き男にふびんとを  
もはれたらんにはすぎじ。  
高橋入道殿御返事

(三)

中央・地方入り乱れてのこの期の言語は、漢字・漢語のもつ特性とその豊富な供給によって、社会的諸事実―政治の変革―と行をもにして複雑化されていく。この複雑さが、ご遺文の代名詞の中にもどのように、その尊卑の待遇意識を持って使われて来たかについて見たかったのがこのレポートである。

「貴殿」「貴辺」「御前」「御身」「和法師」「和殿」

「和御前」「貴殿様」の中の待遇意識を見たかったのであるが、「御」の字を冠する語は、「四条金吾殿」に宛られたもので、その敬語感の相違を見ることが出来なかつた。

対者に親愛感を示す用法として「和」が冠せられ、ていねいの意味を持たせて、「一様」を使用しておられる。

「汝等」は対者を見下し、「汝達」には敬意を含んでいる。

「われ」「われら」は「それがし」「余」よりは上品な使い方として書いておられるようだ。また「わたくし」は、まだ代名詞としては発達していない。公に対する自己一身に関する事を意味する名詞の用法しか持っていない。